小学校「生活科」と「国語科」の関連における相互関係の特質に関する教育課程の事例分析

田　中　　謙

Study on Curriculum of Relation between “Living Environment Studies” and “Japanese” in Elementary School

TANAKA Ken

本研究の目的は、生活科の「紐帯」の特質を明らかにする作業の一環として、小学校における「生活科」と「国語科」との関連を踏まえた教育課程について事例分析を行い、その相互関係の特質を明らかにすることである。そのため、1小学校の教育課程における第一学年生活科および国語科の年間指導計画に焦点をあてて分析を行った。

事例分析から教師はその相互関係の特質を、国語科から生活科に対しては話すこと、聞くこと、書くこと等の国語科における活動が生活科での活動における「伝え合う方略の拡充」や「関わりの深化」になると考えていること等を明らかにした。そして教科・領域間の「紐帯」を複数の「紐帯」から構造化される「ネットワーク」という視点からとらえ、その中で生活科と国語科の関連を検討することの可能性を示唆した。

キーワード：生活科、国語科、教育課程、紐帯、ネットワーク

Ⅰ．問題の所在と研究目的

本研究の目的は、生活科の「紐帯」の特質を明らかにする作業の一環として、小学校における「生活科」と「国語科」との関連を踏まえた教育課程について事例分析を行い、その相互関係の特質を明らかにすることである。

2008（平成20）年改訂の『小学校学習指導要領』において、第1章総則の第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中で、「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること」が指摘されている。今日の小学校においては教科間の関連を図ることを配慮した教育課程の編成が求められると考えられる。このような動きの中で、実際に小学校では教科間の関連に焦点を当てた教育課程の編成の関心が高まり、教科間で連携した授業実践が行われている。

この教科間の関連に着目する1つの要点として、小学校第1学年および第2学年（以下、低学年と表記する）における生活科と国語科との関連があげられる。

生活科に関しては生活科創設の経緯を簡潔にまとめると、1975（昭和50）年10月文部省教育課程審議会「教育課程の基準の改善に関する基本方向について（中間まとめ）」において、低学年の各教科等のうち特に「社会科」および「理科」を取りあげて新教科設置に関する研究の必要性が指摘された。この際の研究では研究の継続と更なる試行的実践を積み重ねていく必要性が指摘されたため新教科開設には至らなかったが、1976（昭和51）年12月18日教育課程審議会答申「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」の中で小学校低学年では「実際の指導において他の教科との合科的な指導が従来以上に行われやすいように配慮する」との改善の具体的事項

が示された。そして1986（昭和61）年4月23日臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」において社会科・理科等での教科の総合化を進めるための検討の必要性等が指摘され、1987（昭和62）年12月24日教育課程審議会「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」において生活科の新設が示された。この答申に基づき、文部省は1989（平成元年）３月小学校学習指導要領告示において生活科を新設した。

生活科はこのような創設に至る経緯にも示されているように、他教科等との合科的な、関連した指導を推進させやすい教科上の特質、つまり「ヨコの紐帯」といえる特質を有している。なお「紐帯」とはアクター間の強度や方向性等も含めたつながりのことを意味する概念である。

また生活科は湯地他（2013）の調査結果によれば「中学校の技術・家庭科との関連性が十分にあると考える小学校教諭等が」多く、「生活科と技術・家庭科の校種の違う教科間での連携」の検討の必要性が指摘されている。更に「幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科」であるため、「幼児期から新入児童期の学びをつなぐ役割」を果たす「幼保小連携の鍵を握る教科」であるとも指摘されている（木村，2011，5）。これらの点から生活科は小学校低学年において同学年間の学びだけでなく、幼児教育・保育、小学校第３学年以降の社会科・理科等の教科教育、中学校の技術科・生活科等の教科教育における学びをつなぐ役割が期待されており、つまり「タテの紐帯」といえる特質を有していると考えられる。まさに生活科は小学校教育における教科間の「紐帯」、そして幼児教育・保育、小学校教育、中学校教育を接続させるための「紐帯」を創り出す教科であると考えられる。

この「紐帯」という特質に関して先行研究がなされており、生活科は他教科と異なり特定の科学体系を背景にもたず、教師が児童の興味・関心や児童の実態に基づき単元を設定するという教科の特質があること（澤本，1998，24-41）、「各学校独自の教育課程を編成する」必要性があること等が指摘されている（野田・前畑，2005，83）。そして「紐帯」に関して生活科と「総合的な学習の時間」との関連に言及した谷坂（1999）、小学校１、２年の生活科の授業を通して幼児期から児童期の学びの移行過程を教師の言語的働きかけに焦点をあてて検討した瀬尾・中野（2013）等の研究がなされている。

しかしながら、生活科の「紐帯」の特質を検討する上では、生活科の観点から他教科や他の学校種等の教育との関連を検討するだけではなく、他教科や他の学校種等の教育の観点から生活科との関連も併せて検討する、つまり相互関係を明らかにする必要があると考える。

そこで他教科との相互関係を考える場合、国語科に着目する積極的意義が見出せる。その意義とは次の２点があげられよう。

１点目は文部科学省中央教育審議会部会等で国語科教育における「他教科との連携」が指摘されている点である。2004（平成16）年文部科学省文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」の中で、学校教育においては「国語教育を中核に据えた学校教育を」という基本的な１つの考え方が提起され、「国語の教育を学校教育の中核に据えて、全教育課程を編成することが重要である」との指摘されている。2006（平成18年）には中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」の中でも教育内容等の改善の方向の１つとして「国語力の育成」があげられており、「国語力の育成は、すべての教育活動を通じて重視することが求められる」と指摘されている。その上で同報告は「国語科教育の在り方」として「他教科との連携」に言及している。この文化審議会答申と教育課程部会報告から、学校教育における国語教育への着目と、国語科における他教科連携の重要性がうかがえる。

２点目は国語科の授業時数が他教科と比して多いという点である。「学校教育法施行規則」（1947（昭和22）年５月23日第11号）において小学校第１学年国語科の授業時数が306単位時間と、国

語科に次いで多い算数科（136 単位時間）の２倍以上の授業時数が設定されている。そのため小学校第１学年の教育課程においては国語科の授業時数の比重が他教科と比して相対的に大きくなる傾向にあると考えられる。そのため大岸（2011；2012）等小学校低学年における国語科を中心とした低学年の授業づくり実践が複数の学校で試みられており、国語科との関連は教科の関連性をとらえる上で１つのメルクマールとなる可能性を有しているといえるのではないだろうか。

以上２点から本研究では国語科との関連に着目して論を進めることとしたい。

そこで本研究では生活科の「紐帯」の特質を明らかにする作業の一環として、小学校における生活科と国語科との関連を踏まえた教育課程について事例分析を行い、その相互関係の特質を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．研究対象

本研究では研究目的を達するため、東京都Ａ自治体立のＢ小学校の 2013（平成 25）年度教育課程における生活科および国語科の年間指導計画について、小学校学習指導要領における生活科の内容の全体構成と国語科の各指導事項、言語活動例に焦点をあてて関連を検討する。

東京都総務局統計部によれば、東京都には 23 特別区 26 市で合計 49 区市があり、区市人口は約 1,304 万人、区市人口平均は約 26 万 6 千人である [(1)]。区市小学校数は 1,332 校、区市小学校平均数は 27.1 校である。本研究対象のＡ自治体は東京都内にあって人口、学校数等の規模が平均的で、学力調査等の結果もほぼ平均を示しているため、事例分析対象として適当であると考えられるため選定した。

またＢ小学校は創立約 90 年であり、児童数が約 250 名、第一学年在籍児数は約 40 名、２学級編制である。

２．分析方法

野田・梶田（2012）による調査研究結果で示されているように、「合科的・関連的な指導」が十分に考慮できていない学校が多く存在している可能性が指摘されている。このような研究結果を踏まえると、事例研究等により各小学校の生活科と国語科との関連を実証的に検討する必要があると考える。そこで本研究では野田・前畑（2005）等を参考にしながら、Ｂ小学校教育課程における第一学年生活科および国語科の年間指導計画に焦点をあてて分析する。

分析に際してはＢ小学校のＣ教諭に聞き取り調査を依頼した。聞き取り調査は 2013（平成 25）年 12 月に１時間程度実施した。Ｃ教諭は 60 代で小学校教員歴が 39 年であり、山崎（2009）等を参考にすると「ベテラン」と目される教員である。Ｂ小学校に平成 25 年度で 12 年在籍しており、同校で１番在籍年数が長い教員である。Ｂ小学校在籍 12 年間中で９年間第１、２学年担任を勤め生活科の授業実践を行っており、聞き取り調査対象者として適当であると考えられるため選定した。

Ⅲ．結果と考察

１．Ｂ小学校教育課程における第一学年生活科および国語科年間指導計画

Ｂ小学校教育課程における第一学年生活科および国語科年間指導計画は表１のとおりである。

２．生活科と国語科の関連

Ｃ教諭は生活科の活動例と国語科の指導事項、言語活動の関連を表２「生活科と国語科の関連」のようにまとめている。

その中で関連に着目して検討するため、本研究ではＢ小学校生活科単元「わたしのかぞく」と「さあ学校たんけんだ」、「どうぶつはかせになろう」をとりあげる。

８～10 月に設定されている生活科単元「わたしのかぞく」（10 授業時間）の活動は、国語科において「話すこと・聞くこと」の指導事項「身近

表１　Ｂ小学校教育課程における第一学年生活科および国語科年間指導計画

	4月	5月	6月	7月	8･9月	10月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	はる② あかるいこえで② どうぞよろしく④ おはなしよんで③ うたにあわせてあいうえお④	ふたりでおはなし④ あかいとりことり① はなのみち⑧ わけをはなそう③ なぞなぞあそび⑥ あいうえおであそぼう⑤	くちばし⑨ なんていったらいいかな③ おさるがふねをかきました③ こんないしをみつけたよ⑤ おむすびころりん⑥ は･を･へをつかおう④	すきなもの、なあに⑤ おおきなかぶ⑦ 本はともだち③ かけるようになった⑧ ひらがなあつまれ②	いちねんせいのうた⑧ おはなしをたのしもう ゆうだち⑨ はなそう、きこう、おはなしきいて⑤ かんじでかこう かずとかんじ⑤ みんなでよもう みいつけた⑨	かたかなをみつけよう③ たのしくつかおう かんじのはなし⑧	くじらぐも⑪ しらせたいなみせたいな⑧	ことばであそぼう② じどう車くらべ⑭ まのいいりょうし① むかしばなしがいっぱい⑤	日づけとよう日⑤ むかしばなしがいっぱい⑤ 本はともだち ずうっと、ずっと、大すきだよ⑩	てんとうむし② ものの名まえ③ おみせやさんごっこをしよう⑩ かたかなのかたち④ たぬきの糸車⑫	ことばをたのしもう② これは、なんでしょう⑧ どうぶつのあかちゃん⑭	にているかん字③ すてきなところをさがしてよもう だってだってのおばあさん⑧ いいこといっぱい、一年生⑫
生活	公園へいこう⑮→ さあ学校たんけんだ⑤→ おおきくなあれ⑯→ アサガオ・野菜・チューリップ・なのはな			虫と遊ぼう⑥→	わたしのかぞく⑩→		(B小学校)冬祭り⑩→ どうぶつはかせになろう⑩→たのしいお正月⑫→むかし遊びをしよう⑩					もうすぐ2年生⑩→

（Ｂ小学校教育課程より抜粋）

なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと」や「書くこと」の指導事項「経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること」につながり、言語活動例「伝えたいことを簡単な手紙に書くこと」に関連する。この点に関してＣ教諭は「生活科の経験があるため国語科で想起できる」とし、「国語科がより豊かになる」と述べており、第２学年では国語科単元「お手紙」（14 授業時間）等につながってと述べている。

４月には、低学年「話すこと・聞くこと」の指導事項「相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと」の言語活動例「場面に合わせてあいさつをしたり、必要なことについて身近な人と連絡をし合ったりすること」と関連深い国語科単元「あかるいこえで」（２授業時間）、「どうぞよろしく」（４授業時間）が設定されている。この国語科単元で行われる活動は、Ｃ教諭によればＢ小学校では学習指導要領における「生活科の内容の全体構成」の「学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かる」に位置づく生活科単元「さあ学校たんけんだ」（５授業時間）の際の校長室訪問の挨拶等につながっていくのである。

「わたしのかぞく」と「さあ学校たんけんだ」の両単元の事例からは、生活科の活動が国語科に、国語科の活動が生活科にと相互に関連していることが考えられ、活動間の「紐帯」が創り出されていっていることが考えられる。

このことがより顕著に表れるのが、10 月から 11 月に設定されている生活科単元「どうぶつはかせになろう」（10 授業時間）と国語科「しらせたいなみせたいな」（８授業時間）である。この「どうぶつはかせになろう」は公益財団法人東京

表２　生活科と国語科の関連

階層	内容	学習対象・学習活動等	思考・認識等	生活科活動例	国語科指導要領	言語活動例
児童の生活圏としての環境に関する内容	(1)	■学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かる ■通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心をもつ		■さあ学校たんけんだ⑤	・相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと	・場面に合わせてあいさつをしたり、必要なことについて身近な人と連絡をし合ったりすること
	(2)	■家庭生活を支えている家族のことや自分でできることなどについて考える		■わたしのかぞく⑩	・身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと	・伝えたいことを簡単な手紙に書くこと
	(3)	■自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることがわかる			・身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと	・伝えたいことを簡単な手紙に書くこと
自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容	(4)	■公共物や公共施設を利用する	■身の回りにはみんなで使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かる	■公園へいこう⑮	・身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと ・大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと	・紹介したいことをメモにまとめたり、文章に書いたりする。 ・事物の説明や経験の報告をしたり、それらを聞いて感想を述べたりすること
	(5)	■身近な自然を観察したり季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりする	■四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに気付く		・身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと	・知らせたいことなどについて身近な人に紹介したり、それを聞いたりすること
	(6)	■ 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使うものを工夫してつくる	■その面白さや自然の不思議さに気づく	■（B 小学校）冬祭り⑩ ■むかし遊びをしよう⑩	・姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと ・互いの話を集中して聞き、話題に沿って話すこと	・場面に合わせてあいさつをしたり、必要なことについて身近な人と連絡し合ったりすること
	(7)	■動物を飼ったり植物を育てたりする	■それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付く	■どうぶつはかせになろう⑩ ■大きくなあれ⑯	・経験したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと	・経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章などを書くこと
	(8)	■自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行う	■身近な人々とかかわることの楽しさが分かる	■むかし遊びをしよう（地域の人に教えてもらおう）⑩	・相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉の違いに気を付けて話すこと	・尋ねたり応答したり、グループで話し合って考えを一つにまとめたりすること
	(9)	■自分自身の成長を振り返る	■多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かる	■もうすぐ２年生⑩	・経験したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること ・自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること	・経験したことを報告する文章を書くこと ・伝えたいことを簡単な手紙に書くこと

（C教諭提供資料を基に筆者再構成）

動物園協会「井の頭自然文化園」での「事前学習キッド」等の「見学補助教材」を活用した事前学習と、同園の動物解説員による支援を受けた見学等を行う学習活動である。この体験や学習は、観察して文章で表現するという「しらせたいなみせたいな」の学習活動とほぼ同時期のため、相互に関連して学習活動が展開されている。つまり生活科「生活科の内容の全体構成」の「それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づく」と、国語科「書くこと」の「経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること」「語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと」という２つの内容が関連していくのである。

このようなＢ小学校における生活科と国語科の関連について、Ｃ教諭は次のようにまとめている。

（１）生活科における「季節の変化と生活に関する活動（自然観察や人とのかかわりの中での気づき）」は、国語科における「記録文や報告文、説明文を書いたり、友達と話し合ったりする題材となる」という「動機付け」である。

（２）国語科における「相手に応じて話す事柄を順序立てて、話すこと」、「互いに話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと」は、「かかわる楽しさが分かる（多くの人と進んで交流していこうとする子どもの育成）」という「伝え合う活動」である。

以上からＢ小学校生活科教育課程は国語科との関連が教師によって意識され、編成されていると考えられる。その関連性は教育実践上に「国語科がより豊かになる」という教師の実感として表れている。従って本事例分析から関連の相互関係の特質について、次の２点があることが指摘できるであろう。

（１）生活科と国語科はそれぞれの活動、指導内容で関連が意識づけられており、その関連性は教育課程上時間的に同時期である場合や「ずれ」が生じる場合も考えられること。

（２）教師はその相互関係の特質を生活科から国語科に対しては、生活科の体験・経験が国語科において児童が「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導における「表現に対しての動機づけ」になること、国語科から生活科に対しては話すこと、聞くこと、書くこと等の国語科における活動が生活科での活動における「伝え合う方略の拡充」や「関わりの深化」になると考えていること。

３.「ネットワーク」構築の可能性

Ｂ小学校では４月の特別活動に「一年生を迎える会」が位置づけられている。「一年生を迎える会」は４月３週目に全校で体育館で新１年生に対するクイズや１年生による合唱が実施される活動である。この「一年生を迎える会」は６年生が主体となって展開される。Ｂ小学校では新１年生が就学する前年度（幼稚園・保育所等在籍時）に行われる「就学児健康診査」で、５年生が「就学児健康診査」対象となる幼児を学校内で案内したり、補助したりしている。幼稚園・保育所等から小学校見学に来る交流活動でも５年生が関わることがあり、その５年生が進級して６年生として「一年生を迎える会」を主催しているのである。６年生は他にも新１年生に対して「トイレの使い方」「そうじの仕方」「休み時間での相手」などを行っている。

この「一年生を迎える会」についてＣ教諭は特別活動に位置づくものであるが、同時に「生活科の内容の全体構成」の「学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かる」との関連、国語科の「話すこと・聞くこと」の指導事項「相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと」の言語活動例「場面に合わせてあいさつをしたり、必要なことについて身近な人と連絡をし合ったりすること」とも関連が深いことを指摘している。実際に「一年生を迎える会」での１年生の活動には４月の生活科単元「さあ学校たんけんだ」、国語科「あかるいこえで」、「ど

うぞよろしく」の活動内容との類似性が高いと考えられる。

従ってこの「一年生を迎える会」は幼小接続における「紐帯」の延長線上に位置する活動であるとともに、生活科、国語科との「紐帯」も存在するのである。このことから生活科と国語科の相互関係は２者関係で完結するものではなく、教科・領域間の「紐帯」を複数の「紐帯」から構造化される「ネットワーク」という視点からとらえられる可能性が示唆される。

ただし本研究ではこの「紐帯」の強弱関係等は十分な検討ができていない。Ⅰ「問題の所在と目的」で指摘したような生活科の特質を考えると、「ネットワーク」の中で生活科が特に教科・領域をつなぐ「ハブ的機能」を有している可能性も考えられる。この点に関しては今後の課題としたい。

Ⅳ．まとめと今後の課題

本研究は、生活科の「紐帯」の特質を明らかにする作業の一環として、小学校における「生活科」と「国語科」との関連を踏まえた教育課程について事例分析を行い、その相互関係の特質を明らかにすることを目的とした。

その結果（１）生活科と国語科はそれぞれの活動、指導内容で関連があり、その関連性は同時期に単元、学習活動が関連する場合や時間的に関連に「ずれ」が生じる場合も考えられること、（２）教師はその相互関係の特質を生活科から国語科に対しては、生活科の体験・経験が国語科において児童が「話すこと・聞くこと」「書くこと」の指導における「表現に対しての動機づけ」になること、国語科から生活科に対しては話すこと、聞くこと、書くこと等の国語科における活動が生活科での活動における「伝え合う方略の拡充」や「関わりの深化」になると考えていることの２点が明らかになった。

また教科・領域間の「紐帯」を複数の「紐帯」から構造化される「ネットワーク」という視点からとらえ、その中で生活科と国語科の関連を検討することの可能性を示唆した。

今後の課題としては、先述のほかに本事例の結果が他の事例にも応用可能か検討すること、また教育課程のみならず実際の実践内容から「紐帯」の特質を検討すること等があげられる。

Ⅴ．謝辞

本研究においてはＢ小学校Ｃ教諭に多くのご協力を頂きました。ありがとうございました。またＣ教諭のみならずＢ小学校のＤ教諭にも研究をまとめる上で貴重なご助言等を頂きました。お名前を出すことはできませんが、Ｂ小学校、Ｃ教諭、Ｄ教諭に記して感謝申しあげます。

Ⅵ．注

(1)　東京都総務局統計部 Web サイト「住民基本台帳による東京都の世帯と人口平成 25 年１月」（http://www.toukei.metro.tokyo.jp/juukiy/2013/jy13000001.htm）（Last access:20140123）

Ⅶ．引用・参考文献

木村吉彦（2011）「幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科の教科特性とスタートカリキュラム」上越教育大学附属小学校内高田教育研究会『教育創造』169 抜粋（http://sun-cc.juen.ac.jp/~kimura/kyouikusouzou.pdf）（Last Access:20131206）.

野田敦敬・前畑朱里（2005）「生活科の年間指導計画の在り方に関する研究―愛知県岡崎市の年間指導計画の分析から―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』8，83-90.

野田敦敬・梶田尚吾（2012）「生活科の年間指導計画の作成に関する調査研究」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』2，57-63.

大岸啓子（2011）「国語科を中心とした低学年の授業づくりⅠ」『神戸海星女子学院大学研究

紀要』50，11-18.
大岸敬子（2012）「国語科を中心とした低学年の授業づくりⅡ」『神戸海星女子学院大学研究紀要』51，5-12.
澤本和子（1998）「教材を研究する力」澤田　匡・生田孝至・藤岡完治編著『成長する教師』金子書房，24-41.
瀬尾知子・中野良樹（2013）「小学校1，2年生活科の授業における教師の言語的働きかけの検討―幼児期から児童期への「学び」の移行―」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』35，107-122.
谷坂明代（1999）「小学校の生活科の現状と課題」『物理教育』47（5），274-277.
山崎準二（2009）『教師という仕事・生き方―若手からベテランまで教師としての悩みと喜び、そして成長―』（第2版）日本標準.
湯地敏史・藤元嘉安・岡村好美・ケンタノマーヤナワン（2013）「生活科の実態における小学校教諭向けアンケート調査」『宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学』28，119-128.

（埼玉東萌短期大学講師　田中　謙）